

今江祥智
の本
第10巻

ばるちざん

理論社

今江祥智
の本
第10巻

はるちざん

理論社

今江祥智の本第10巻

一九八〇年四月初版

一九八八年五月第六刷

著者 今江祥智◎

発行 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話 営業〇三(二〇三) 五七九一

出版〇三(二〇三) 五七九四

編集〇三(二〇三) 二五七七

振替 東京九―九五七三六

落丁・乱丁本はお取り替えます



タンポポざむらい 7

ごまめのうた 21

はじめに 23

1 竹刀 24

2 ひしゃく 28

3 夜 31

4 はらまき 34

5 のっぽとふとっちょ 38

6 三人ぐみ 42

7 とくりととしより 46

8 「おゆき」のこゆき 51

9 「はたしじょう」 55

10 たたかい 59

おしまい 61

しばてんおりょう 63

ばるちさん 75

ああ、禪 77

こんやく閻魔 81

掬る男 85

兄弟 89

侍 94

いろはかるた 100

阿羅漢長五郎 105

一目千両	110
雪女	115
鬼	120
龍	125
神鳴	130
河童	132
天狗倒し	137
てんぐ山彦	143
フクロウ	149
きのこきのこきのこ	152
こわい	157
熊旦那	162
石の祭	168
太郎づくし	173
桃の太郎	175
浦島の太郎	178
ものぐさの太郎	181
金太郎	186
こんび太郎	190
三人桃太郎	195
ばるちさん	201
あとがき	215
解説 灰谷健次郎	217

編集委員 上野 瞭

長新太

灰谷健次郎

装 幀 平野甲賀

装 画 長新太

制 作 小宮山量平

発 行 山村光司

編集担当 日比野茂樹

本 文 加藤文明社

表 紙 ダイニツク

カバ ー トライ印刷

製 本 誠製本

用 紙 十条製紙／日興紙業

今江祥智の本
第10巻

タンボボざむらい
ごまめのうた
しばてんおりよう
ばるちざん

タンポポをむら

1

むかし、まだみんなが頭にちょんまげをのせていたころの話——といっても木田一平太のばあいは、ちょっとばかり話がちがいました。

子どものころはふつうだったのに、いざ元服——さむらいの子がおとなになるぎ、いきをするころになると、かみのけが、きゆうにうすくなってしまったのです。おかしいな、とおもっているまに、くろぐろとしていたかみの毛はみるみるうすくなり、ぬけおちて——気がついてみれば、タンポポのわた毛のようにふうわりしたのが、うっすらとのこっているばかり……。

ちょんまげのものであるかみの毛がそれでは、ちゃんとしたまげがゆえません。

はかまをはき、かみしもをつけ、刀をさして——すがたかたちはりっぱなさむらいだし、口も、ま一文字にぐいとむすんでいるのに、頭がタンポポのわた毛のようでは、どこかしまらない。みんなは、そんな一平太の頭に目をやると、はなをならし、よこをむいては、ぶふう……と、小さくふきだしてしまうのです。一平太がきばればきばるほど、その顔がタンポポ頭とにあわない……。

とうさんかあさんは心をいため、いしゃや、くすりやに、たのみまわりましたが、どうにもならない。いっそ、おとしよりなら、おもいきってそってしまえばいいのですが、元服したてのわかざむらいでは、どうにもかっこ

うがつきません。毛はえぐすりなど、そのころにもあるわけがないのだからどうしようもない。

けれど、一平太は平気でした。

ちょんまげがなくても、さむらいとしてのしごとはちゃんとつとまると考えていましたし、じっさい、一平太はなにをさせても、おない年のなかまには、めったとまけませんでした。刀、やり、馬、ゆみをあつかわせても、本をよませても歌をつくらせても、だんぜんうまい。

そのことは、みんながしていました。

ところが、さて、一人前のさむらいとして、おない年のなかまと、そろっておしろづとめをはじめた日のゆうがた、うわやくが一平太をよびました。

どうも、その、なんでは、とのがごらんになられてはこまるでの……。

とかなんとかいって、一平太におしろづとめはごえんりょうもうしあげるよういわたしたのです。

ずらりとちょんまげのくろい花がさきならんだなかにただひとつ、タンポポのわた毛がふうわり……ではめだつてしようがないし、そのくせそのタンポポさむらいが、なかまのなかで、ぐんをぬいてなんでもできるとあつては、いよいよめだつ。たとえ、うでをかわれて出世しても、タンポポはタンポポ。わがはんのわかざむらいがそれでは、よそのはんのもののわらいになりはせぬか……というわけらしいのです。

一平太はそんなりくつはいみがないとおもいました。けれど、べつにおしろづとめばかりがさむらいの生きかたでもないわ……と、平気で、よろしゅうございませよ……と、ひきさがりました。

家にかえって、これこれしかじか——と、わけをはなすと、とうさんかあさんは顔を見あわせて、ふかいためいきをつきました。これでもう、一平太がさむらいとして出世する道はふさがれてしまったようにおもえたのです。

けれど、一平太は平気でした。

それまでとおなじように、じぶんのへやにこもって本をよみ、一日のうち半分は、庭にでて、刀、やりのけいこ。朝は早くから、うら山に馬をとばして、ゆみのけいこに馬のけいこ。

おかげで一平太のからだはもりもりつよくたくましくなり、見るからにたよりになりそうな、カシの木みたいにながしりした男になりましたが、頭はやっぱりタンポポのわた毛のまま……。

けれども一平太は平気でした。

一平太ほど平気ではありませんでしたが、そんな一平太のことをりっぱだとおもう人はいました。いもうとのかなえです。

かなえはにいさんとはんたいに、くろぐろとうつくしいかみの、ほっそりした女の子でした。かみの毛はながく、かたの下までもありました。かなえは、山菜をつみに山にはいるときなど、とおくから、そんなにいさんのすがたをそっと見ていて、

（あれでこそほんとおさむらい……）

とおもっていました。

どのくらいそんなふうにして日がすぎていったことでしょうか。

一平太とおない年のなかまは、あいもかわらぬおしろづとめの毎日のうちに、すこしずつすこしずつ、一平太のことをわすれていきました。はじめはじぶんのとったたいどを気にしていたあのうわやくも、やがてそのことも、それからいつか一平太のことさえ、わすれてしまいました。

そしてまた、日が月がすぎていきました。

一平太の毎日もおなじことのくりかえしでした。ただ、おしろづとめのなかまとちがうのは、一平太のほうはますますつよくたくましい男になったことで、いまでは町ですれちがっても、れんじゅうは一平太とはおもわなかったでしょう。もっとも、頭を見なければの話でしたが……。

いもうとのかなえは、そんな一平太とはなたいに、いよいよほっそりやさしいキキ^ヨウの花みたいなむすめにそだちました。

*

そして、どのいくさもそうだったように、ある日とつぜん、いくさがはじまりました。てきのぐんぜいがこっそりすばやく、この国のしろをとりかこんでいたのです。

のんびりしたおしろづとめになれすぎていたみんなはおおあわて。ゆみのつるをはりなおし、刀、やりを手に、しろにかけあつりましたが、てきぐんのせめこむの早かったこと。

一の門、二の門がおち、とりでにかけられた火が町にもえうつろうとしたとき——おそろしいいきおいで馬をとばし、てきぐんのまんなかをかけぬけて、しろにはいった男がいました。さえぎろうとかけよったてきのぞうひょうたちは、つむじ風にまきこまれたスミレみたいはどうしようもなく、はしりさるあいてを、あれよあれよと見おくっているばかり……。

しろのれんじゅうのだれもその顔をおぼえていませんでしたが、むろんその男こそ一平太。日ごろきたえにきたえぬいた刀、やり、ゆみをつかいこなし、三の門にせまるてきぐんのまんなかにおどりこみました。きりたおし、つきまわし、ぶちのめし、射ころす。

—お、おにじゃ。おにがでよったぞお……。

てきぐんのなかからそんな声があがり、声といっしょににげていました。にげながらも「おに」のうわさをひらめ、うわさはすぐになんばいにもふくれあがり、「おに」は五人、十人にふえていって、おしまいには、このしろにゃおにのぐんぜいがおるぞお……となつて、しろをびっしりととりかこんでいたいっかくがくずれました。どつとにげだしたのです。そうなるもまた、このおくびょう風のひろがるの早いこと。てきぐんはあちらでも、こちらでも、クモの子をちらすようににげちりはじめました。

――まてまてまてい。とどまれ、とどまれい！

さむらいだいしょうがどなりつけ、わめきたて、ぎとぎとするような刀をぬきはなつて、――にげるものは、わしがきりすてるぞ！

おどかしてみたのですが、こうなつてはもうどうにもとまらない……。

――ええい、なさけなや。おになどこの世におるわけはな……。

ぼやきながら見たすと、せまってくるあいてのなかにひとり、ぐんと大きくつよそうなのがいるではありませんか。あら馬にまたがり、すなをまきあげ石をとばして、まっしぐらにかけてくる、その早いこと、あらあらしいこと……。

（あれがおにか。それならば、あやつをうてばみかたのおそれもきえ、にげちるのもおもいとどまろう……）
そうおもったたいしょうは、どうぶるいをなんとかおさえて、「おに」にむかつてどつと馬をはしらせました。ふたりのいきおいにのまれてか、わわわわ……とひろがるてきみかたのわのなかで、ふたりは馬をとめ、にらみあいました。

たいしょうが太刀をずらりとぬきはなち、「おに」がやりをふりかざす。

――おおうりゃああ……。

じぶんを上げますようにたいしょうがひとわめきして馬をすばやくまわし、「おに」のまうしろからおそいかりました。ぐいとかぶとをつかみ、おさえておいて首をひとうちに——とおもったのです。

ところがなんと、たいしょうはかぶとごと「おに」の首をひきぬいてしまった——とおもったのはまちがいで、かぶととかみの毛をもちあげていたばかり……。

—ああ、ちょんまげが……。

たいしょうがあっけにとられて声をあげたのもむりはない。かぶとをとられた「おに」のほうは、ちょんまげぬきの、あのふうわりしたタンポポ頭。けれど、あきれているひまなどなかったのです。「おに」のやりが、口をあんぐりあいたたいしょうのよろいの上から、むねをくしざしにしました。たいしょうはそれきり口をとじることができないまま、どうと馬からころげおちました。

—やっぱり、おにじゃあ……。

まわりをとりまいていたてきぐんにさけび声があがり、わがくずれ、ちりぢりににげしました。これでもう、しろのかこみは、ちぎれたおびよりもたよりなくとけていきました。

—ふうっ、かつらではやっぱり、こんなにあっさりとれてしまうか……の。

「おに」はタンポポ頭をすいとひとなでするとにがわらい、足もとにおちているかつらつきの、かぶとをひろいあげました。

*

いくさがおわると、「おに」はとのさまによれました。このたびのはたらき、まことにめざましいものがあつた、ほめてとらす、頭がタンポポでもくるしゅうない……というおことばらしいのです。